

金子みすゞとそのふるさと

白石 一美

序

金子みすゞの詩作品と詩の背景をなす環境面に考察を試みる。作品は海関係を中心に三つ四つ、環境面は彼女の鯨魚詩成立の背景をなす古里の歴史と文化を中心に調査考察する。

一 『学校』

舟でくる子もありました、
 つしらは山で蝉の声、
 田圃を越えて海がみえ、
 赤い瓦に、雪が消え、
 新入生のくるころは、
 黒いつつみを背におひ、
 赤い瓦の学校よ、
 水にうつつた、影のよに、
 いまはこころにあるばかり。

作詩技術、縁語掛詞が目立つ。堤は 包みの掛詞、ゆきは 雪の掛詞にして かへるの縁語、かへるは蛙の変化形にして「帰る」の掛詞、かへる かへるの変化は、学校国語文法、帰ら・帰り・帰る・帰れなどの国語動詞活用を想起、こうしてみすゞの心情表現にかよつた動詞風の揺れ動きは 詩の終末部に収束されてゆく。
 青い葉、緑をかきわけて、あかい苺とても表現できるところ、

あえて 黒い包みを出すにはわけがある。これを 堤と掛詞して念押しフレインし、心ひそかに文字に刻み込むためと判断する。

この堤の地名としての固有名詞を答えよと問われれば答に窮す、みすゞと級友、それに里の人々のみ知る小池提ゆえに。俗に「フンヂユウ(藤中)のカエルツツミ」と言つ。みすゞはこれを「帰る(蛙)」「と」「つつみ」に二分割し変形分散、その心とともに詩の中にそつとつつみ込んだものであろう。

詩の中に小池堤の名称が見え隠れする。その所在地は山口県長門市東深川藤中である。この地に彼女の卒業校大津高等女学校がかつて存在し、瀬戸崎尋常小学校近辺に堤や山は存在しない。それゆえ『学校』は実在した母校高女と時の推移を想いつつ創作された作品と判断してほぼ誤りないものと思われる。

詩の問題点 みすゞが東より西へ登校する方向本位に記す。登校途中、緑ヶ丘地区よりさらに西へ、池を左手に堤道を進み、堤の終端に鹿嶋廣夫やよひご夫妻の寓居(1965)、四・五軒ほど家が續いて左折、正門に至る。正門前の前方(北)に田圃さらに北面に海がある。この正門を基準点とする(正門前で顔は北向・方角は概略)。校地の位置が不明瞭である。詩の内容から校地は堤と山の間で明瞭と反論の向きもあるか。堤と山の間校地が例えばV字状に介在すれば反論は成立する。だが実在として成立せず、詩の第 連全体は実は校地の東側面を描く。

詩に記す「まへ」は「つつみ」か「田圃」か、これが問題となる。実在としての位置 A 海・B 田圃・C 正門・D 校舎、この北 南の直線軸の東側、前述正門前より家屋数軒隔てた東側に堤が、堤の奥（南）に山がある。ゆえに学校前方に堤を望めば学校の後方は西の例えば板持地区や正明市地区方面となつて、第 連の表現は実在的には無理であり成立しない。

推測を加える。多分、当初草稿に正確なる実在位置が忘れもせず記述された、例えば「まへは田圃で海がみえ、真帆も片帆もゆきました。」などと。だが彼女は景色の展開や四季の推移など文芸効果に傾注して実在位置への配慮を忘却した。これを「田圃を越えて海が」と改め、削った「まへは」を新規追加部分に移したと推測。新規追加部分とは現在の第 連のことである。

うしろは山で蝉の声、まへはつつみで章の風

（前後の順、不自然ながら倒置は 峠と 山の接続に配慮）
だから「まへ」と「田圃」は彼女の意識無意識、彼女の心の中では緊密に重なり連続し、自身の矛盾に気付かなかつたと推測する。彼女はこの推敲に四季の推移とリフレイン効果を得たが校地の実在表現が後退して正確なる母校の位置を失つた、と思う。以上、執筆創作過程における推敲追補の痕跡を指摘した。

補説 「峠を越す子もありました。うしろは山で」とあり、連歌俳諧の付合と言うべきか、字面の上で絵にはなる。だが最も近い深川村と日置村境の椎木峠^{（まへ）}は正門前を西へ数km、他方、「山」は学校裏手、実在上 と は連続展開しない。

「かへる」はケロケロならぬウオーンと低く鳴いたか、虚構設定を含めて委細略し問題提起に止める。

二 『海と山』

海からくるものゝなほに。

海からくるものゝ夏、風、さかな、バナナのお籠。

それから、新造のお舟にのつて、海からくるものゝ住吉まつり。

山からくるものゝなほに。

山からくるものゝ冬、雪、小鳥、炭積んだお馬。

それから、ゆづゆづり葉にのつて、山からくるものゝお正月。

高遠信次氏^③はバナナから下関の詩と、今野勉氏^④は山は青海島大日比地区・住吉は同じく通地区の祭と解し青海島の詩とされる。両論別れるが論者は青関不問の一般詩の立場をとる。ただ青海島とすれば問題が生じる。端的には青海島に炭積む馬は不要である。

炭焼きは俵山、深川を中心に^⑤行われ、海辺の仙崎へこれを選び、小舟で島へ渡され、炭積む馬を小舟に載せる必要はなく、木炭の島内生産は山林面積や伐採 植樹 伐採の回転から永續性がない。

「角の乾物屋の」に「三軒目の酒屋の、炭俵、山から来た馬いいま飼葉。」とあり、「町の馬」に（空車を引いて山へ帰る馬は衆だが逆に海から山へ峠越）魚積む馬は重労働で叱られ叱られ「かなしい馬よ」とみすゞは言つ。

「住吉まつり」は海の、夏イベントの総称を単なるこの一名詞で具象化表現したことと思う。大阪の住吉大社 長門国一ノ宮の下関住吉神社 博多住吉、これを俗に日本三住吉という。住吉社は対馬に至るまで他に数多く、その他、海洋系に宗像金比羅殿島責船……・豊漁神西宮えびす御伊勢など数多ある。以上の総称、日本四海への広がりや個別各社の歴史的奥深さ、その空間時間の総体を住吉一語で表現。作品前半「住吉まつり」と後半「お正月」の対称性、この対比から冬に対する夏のイベント、児童には籠盛りの夢の果物を

もたらず海、その海を渡って人々に幸をもたらず神の夏祭、かかる概念を「住吉まつり」一語に託して表現したと判断する。

注意すべきはこの詩の中心をなす虚構「新造のお舟」の奥底にひそむ無言の表現である。

「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」

(『星とたんぼ』)

神幸船を毎年「新造」することは経済的に負担が重くて無理であり、また何十年ぶりのその機会をとらえた詩とも考え難い。「新造」は方便としてのウソ即ち虚構設定と判断する。だが光に対する夏祭の影の部分、老廃船や諏訪思想における贄の如きには全く言及しない。重要箇所で沈黙し、読者に拡がりを与える。

新造の対称語は後半のユズリ葉であり、みすゞは作品前半で活位面本位に表現するが贄面を叙せず終末をユズリ葉・正月に括る。朝日新聞の天声人語(1909.4.8)に「ユズリ八という木をこ存じだろつか。若葉が出そろったのを見届けて古い葉が落ちることから、この名がついた。生命力を譲る、勢いを絶やさぬ縁起物として、祝い飾りにも使われる」とあり、若葉の新生を見届けるという。

「ゆづゆづゆづり……」と同音重ねに口こもりつつ動感を表現、若葉たちにはうれしのお正月であるが、うれしくもありうれしくもなしオラが春、長幼世代差が解釈を分ける童謡詩である。分けるとは子供は即物的ゆえに表現の底へ眼を向け得ないからである(子供向に具象化して「それから大きなお船にのって……」と表現すれば詩の主題を失う)。正月もまたみすゞに底の無言とともに寂寞をもたらずものの如くである。

みすゞは、光と影を対等に扱った作品、例えば『大漁(浜辺の大漁と海中の葬式)』の如きも作詩する。だがその心は、前述海洋神を例

にとればその奥深さと拡がり、次の幽界の花、むしる捨てられ顧られぬバナナの皮(『海の色』)や譲り落ちる葉に向く。喪失とは何か。同傾向の作は多いが『花火』を引く。

あがる、あがる、花火、花火はなにに、やなぎと毬に。／＼消える、消える、花火、消えてはなにに、見えぬ国の花に。

三 『海の色』分析のために(序説)

『海の色』は下関を詠んだか仙崎か。高遠氏はみすゞの下関に対する嫌悪感を本作に看取せられ、今野氏は仙崎と論が別れる。論者は素材ランチより推せば下関とみるが、完成度を含めて難解で問題点の指摘に止めたい。まず『弁天島』ほか関連資料を挙げる。

「あまりかはい島だからここに惜しい島だから、／＼貫つてゆくよ、綱つけて。」

北のお国の船乗りが、ある日、笑つていひました。

うそだ、うそだと思つても、夜が暗うて、気になつて、

朝はお胸もどきどきと、駈けて浜辺へゆきました。

弁天島は波のうへ、金のひかりにつつまれて、

もとの緑でありました

漁師が帰国まぎわに「豊漁ついでにこの豆島も引きずって」云々、マドロスならぬ江戸時代以来の西回りの船乗りの島引く言か。

弁天島別名松生島は藩政時代より仙崎浦における回船の繋船場所三か所の一つであり、仙崎港東の至近距離に位置し、豊漁と安全を祈つたか厳島神をまつる。島まで持去られると「いまは鯨はもう寄らぬ、／＼(鯨捕り)浦は貧乏になつて困る。資源保護風のケチな解釈で、別釈すべきか。

(みすゞの初夢、『去年』を積んだ黒い帆かけが初日に追われて西へと逃げる。『お舟、ゆくゆく、あのゆく先に、去年のあがる港があるか、去年を待つて、たあれか居るか。』という作品もある。)

昔ながらの帆かけの往来は『学校』からも見え、その他郷土史類に抛れば数百トンの小型鉄船が海運船として仙崎に出入りした模様である。

その海運は当地方に開通した陸運即ち鉄道にその座を奪われて急速に衰微した。委細『豊北町史一』(1994同刊)に譲るが下関より延びる鉄道は山口県西北沿岸部(1925滝部まで)に及び、みすゞ没年(1930)に下関・萩駅間全通。高女卒業後ほどなく仙崎・下関間を小型船で往復した彼女は鉄道工事を船中で見聞したか。鯨も寄らぬ仙崎と黒い帆と重なるか。

さびれゆく仙崎に対して下関はどうか。当時、旅客機も海底トンネルもなく、東京始発鉄道本線の西の終着駅、大陸への足がかりであった。下関の夜、『キネマの街』はその雰囲気伝える。

あをいキネマの、月が出て、キネマの街に、なりました。

屋根に、黒猫、居やせぬか。

こはい、マドロス、来やせぬか。

キネマがへりに、月が出て、見知らぬ街に、なりました。

下関の朝日館か、怖い男の映画を鑑賞後、下関したみすゞが上気した気分での夜の下関を歩き、キネマと外国航路船員とを重ねたか。彼女が「映画のことよ」と映画に託して傷つけまいと配慮した下関の夜、昼間と異なる雰囲気、たむろする外国航路船員、かかる景が当時の夜の下関に存在したことである。仙崎は、マドロスとかキネマのようなハイカラなカタカナ語が通る町ではなく、論者の知るところ方言の飛び交うリョード⁷地であり、田舎町である。

『海の色』は難解である。作者の心像が純一にしてブレが無いとき、読者側の負担は小さくわかりやすい。一二例挙げる。冬の心ざびしい夜、窓外の様子か、『港の夜』の情景が展開する。

曇つた晩だ。ちひさい星がふるへふるへ、ひとつ。／＼
さむい晩だ。船の灯りが映つてゆれて、ふたつ。／＼
さみしい晩だ。海のお瞳があをく光つて、みつ

ものを見る基準点が定まり読者の関心は第三連に向かう。ただし心と言葉の関係はどうか。次の『木』は空間よりもむしる時間を問題とする作である。

お花が散つて、実が熟れて、／＼その実が落ちて、葉が落ちて、／＼
それから芽が出て、花が咲く。／＼
さうして何へん、まはつたら、この木は御用が、すむか知ら。

これは明らかにブレがなく前半の短サイクルの輪廻をつけて読者の注意は末尾に向く。一本の木に現れる四季の命、言わばその無限の輪廻に対して労りとも疑問とも解せられる心に注意が向く。

『海の色』は視点がブレる作と判断する。色のみにこだわりの心が一つにまとまらぬまま執筆したか、素材がバラバラであつて統一体をなさぬ観がある。次の『は遠方より逆光を見て船影が黒くシルエツト化』は至近距離の景で視点が一致しない。は室内からか。

朝はぎんぎら銀の海、銀はみんなを黒くする。
ランチの色も、帆の色も、銀の破れめもみな黒い。／＼
昼はゆらゆら青い海、青はみんなをあるままたまに。
うかぶ薫くつ、竹のきれ、バナナの皮も、あるままたまに。／＼
夜はしづかな黒い海、黒はみんなをおひかくす。
船はあるやら、ぬないやら、赤い灯のかけばかり。

軍艦に積むボートの中、手こぎをカッターと、長さ10m前後のエンジン付をランチと言う。「帆」は田舎わたらいの舟、町に魚を、村に雑貨をもち帰る浦めぐりの帆かけと思つ。

多分関門海峡の海面であり、海面は朝昼晩に銀青黒と変化する。

黒い帆やランチが銀面に、あるまま各色の塵埃が青面に、赤い灯が黒面に浮かぶ。だが互いに序破急の連絡統一もなくばらばらであり、各素材間の横の連絡が例えば『木』の如き必然性をもたないのて読者が詩の統一像を結ぶ上に問題が残る。添削を要するか、より深い解釈鑑賞力か。

全三連中、第 連がズーム接近せられて際だつ。人が捨てた塵埃が日中ゆらゆらと所在なげに「ある」はかなさの表現か。だが前連後連との関係は禅問答のように難解であり、作品解釈に読者の負担が重い。みずゞ当時の下関のゴミ事情を調査するに、彼女が仙崎より下関に移り住んだ大正十二(1923)年四月、「東部におけるごみの海上投棄をやめ、後田町の低地に埋没処分する」といふ。海が汚れるわけであるが、渡航者のポイ捨ての前にはこれも無力である。

四 入江の岸で

『お坊さま』あるいはこれを父恋しと解し、あるいはこれを祖父に手を引かれた詩とする論もあつたかと記憶するが、委細省略する。

入江は、具体的地名ぬぎの詩的虚構で読者の胸に一般普遍的にイメージされる入江で通用する作品と論者は思うが、彼女が毎日見た入江の風景として、『海の花園——沢江の海にて——』の冒頭「入江の底の花園は、舟のうへから見られます。」、仙崎湾の南奥の沢江がある。歩けば実家『小松原』白濁 小浜 沢江、大津高女通学程度の距離である。日常生活の基盤は仙崎にあり、仮に白濁が小浜の辺りの海の岸辺にたたずむイメージとしてみておく。

金子みずゞの関心と活動は詩の創作である。彼女に「父恋し」があるにせよ詩の主題・題目に父そのものを正面に据えれば感傷となる。根底に父への思いがあるにせよ父自体は彼女が詩中に何かを表現する素材の一つであり、脇である。「お坊さま」を次に引く。

小さい波が来てかへる、入江の岸のみちでした。

私のお手々ひいてたは、知らない旅のお坊さま。

なぜか、このごろおもふこと、お父さまではないか知ら、

けれども遠いむかしです。とてもかへらぬむかしです。

ざわざわ、蟹が這つてゐた、入江の岸のみちでした。

私のおかほみてゐたは、たんぼぼ色のお月さま。

第 連「なぜか、このごろおもふこと、お父さまではないか知ら。」は「知らない旅のお坊さま」を修飾する機能とともに別の機能、すなわち時間を分断して彼女を現在にひきもどす機能を有する。結局みずゞはお坊さまの進む道のあとについてゆかなかつた、(白濁が小浜から元に「かへる」)それで今の私がある、精神的工ネルギーは幽玄なる奥へ進み去つた彼へ傾くにもかかわらず。

第 連を削除すれば 全文過去回想の平叙文と化し(入江

の岸辺での昔の出来事)、最後に脈絡もなく、月が現れる。

(第 連の存在が散文を詩に転ぜしめ本詩の成立要件となる)

詩の分析 小さな波が来てかへる、「かへる」は寄せては「かへる」小さな波、心の動きを感じさせる表現である。純粹に小さな、濁りを含まない心の動きかと思つ。そしてこの「かへる」を含む第 連の情景場面はリフレインされて「とてもかへらぬむかしです。」と否定、濁りなき小さなその否定(昔の事)である。

入江の奥(右折すれば高女・下関、左折すれば萩・山口方面)、お坊さまの進む道の後に従つてゆく第 連の視点は、詩の終末部近くに及んで「ざわざわ、蟹が」と視点が足もとに焦点化され、以前

の小さな心の動きはここでは胸騒ぎと濁りも感じるものに変化、再び「入江の岸のみちでした」とリフレイン・刻印される。終末部、足下に焦点化された視線は三転して空へ移り、月を仰ぐみすゞの顔がうかがふ。みすゞの自己表現像と思う。

実は大人の詩であるが「お手々」「たんぼぼ色」などと童謡詩風に韜晦し逃げた作品ともみられる。児童向には僧よりも「知らないよそのおじいさま」が良い、よほど身近で即物的ゆえに。なぜあえて児童に遠いお坊さまか。人生は生か死か、大別すればこの二つである。お坊さまが彼女を手引く先は亡父の住む死の世界か、それとも結婚、新しい生か。以下、生本位に論をすすめる。

第一連に「とてもかへらぬむかしです」とある。「昔昔、あるところにおじいさんと」、昔話のはわが誕生以前と漠然とながら児童が承認する。誕生以後、児童の歴史は六年七程度であり、「ほくもおじいさまにお手々ひかれる」のは昨今のこと。表現内容の「とてもかへらぬむかし」としてのA承認は、コブ取り話のドラマ性あればともかく人生における人と人との別れのB意義は児童には抽象的すぎて理解困難である。創作上、児童向に話材や時や用語を選んだ(黄色 たんぼぼ色の要領で)即物的に表現する必要がある。

そのことは『口真似——父さんのない子の唄——』と比較すれば歴然とする。みすゞに父恋しがあるにせよ、その身と心を一度他に移し置いて他の将来をはかることである。こちらは即物的現在、児童を正面にすえており、感情移入した彼女の心は児童に没入・一体化し、ここにあるのは父なきその身の上と児童へのあたたかい表現である。

「お父ちゃん、をへしてよつ。」
あの子は甘えて、いつてゐた。

別れてもどる、裏みちで、お父ちゃん。」

そつと口真似して見たら、なんだか誰かに、はづかしい。

生垣の、しるい木槿が、笑ふやつ。

「お坊さま」が難解である原因は彼女が「知らない旅のお坊さま」の実体を細叙せぬことにある。この詩は要するに、お坊さまは入江の奥へ先へと歩み去ったがいま思うとそれもはるか昔のことと別れた岸辺の足下にはざわざわと蟹が這っていたことだった……という別れのイメージがある。

素材としての僧の取扱いであるが、二十五歳先輩の晶子は「みだれ髪」に若い清僧を詠み、女が気を引く趣と解するが近付き難いイメージである。より先輩の「葉」にも「たけくらべ」であったが、伊勢物語の筒井筒を逆手にとつたような趣の、かたや芸妓へ、少年は仏門へと夫々青春の道を行んでゆくかのイメージの作がある。

みすゞと晶子と一葉と、この三者に共通する視点を設定すれば、近づくにせよ別れるにせよ、お坊さまに対する距離と、異性としてこれを見ている観とがある。結局みすゞはその跡を追うことなく、みすゞのもとには今生きているこの現実がのこっている。

なぜか、このころおもふこと

「お父さま ではないか知ら。」

部分に被修飾・倒置語句の省略があり、そこを略し曖昧化したとも思うが運命であり他人の個人領域に立入る。ここは単に文脈上「お坊さまへの修飾よ」として読者に解せらるべく父を借りて曖昧化した、とみておく。前述したがお坊さまが視界の奥へ去ったあと、視点は足もとへ移る。「ざわざわ、蟹が這つてゐた、入江の岸のみちでした。」と。三転して「私のおかほみていたは、たんぼぼ色のお月さま。」と視線は上空に向かう。蟹もまた実体の細叙がない。(不安と濁りをともなうお足お金の悩みはあまりにも即物的で

あるうか)

こうして父も僧も消えて月に照らされる姿ただ一人のこる。孤独な自己表現の詩である。読者層や完成度はともかく奥のある詩かと思ふ。

例えば僧のような人との結婚とか、死んだ父の世界への参入¹¹自殺とか、ずっと遠い別の所へ赴くに、その一歩手前まで来たが、一線を踏み越え進み得ず、佇み引き返し諦めた詩、一言で言えば、何かを越えられなかった、断念の詩である、と思ふ。

五 みずゞの詩の歴史文化的背景の一面

金子みずゞに鯨や魚の詩がある。一々の詩の引用を全て省略して、その鯨魚供養の遠いゆかりと思想的背景にふれてみたい。

天台浄土系説経書と覚しき、14世紀中期、南北朝の『神道集』¹²に鎌倉時代の諏訪信仰がみえる。神道集は室町末期の浄土宗の僧にも波及し、海彼に及ぶその布教活動結果は『琉球神道記』¹³の出版をみた。中世より近世への移行期、浄土宗僧侶の活動が活発化する¹⁴とき、信州諏訪の狩猟思想は日本海に浮かぶ小さな島にも波及して言わば海における二重の罪障として刻印せられ、鯨の胎児、子鯨供養の墓としてその建立をみたものと思われる。

鯨回向が長門市通の向岸寺で執り行われ、近くに鯨の墓がある。墓の正面上方に南無阿弥陀仏、その下に「業盡有情 雖放不生 故宿人天 同證佛果」(側面に「元禄五年壬申五月」)とある。偈の解釈文を次に引く。

銘文は「業の尽きた子鯨よ。今さら海に放つても生きることができないのだから、どうか天界に宿って仏の功德を受けて欲しい」という意味である。(長門市歴史編・1981・p968)

胎内児の殺生であり、殺生に殺生を重ね、業盡有情^{ゴウジンジョウウ}・雖放不生^{スエハツシヨウ}の意味は重い。だが人天界に宿るとはいかなる意味か。

平成六年秋、ある機会¹⁵に鯨墓の文面を見つけて驚いた。鯨墓の偈は所謂「諏訪の勸文(神文)」であり、神道集の最終尾、巻第十「諏方縁起」末尾のものと同文である。神道集の該当箇所を論者がやや現代文風に改めて次に記す。

^{12,3,7}「嘉禎三年五月に長楽寺の長老寛提僧正(論者註 僧正は司法警察に近い概念)が諏訪社神前のお供物に不審をなして何故多くの獸を殺しなせるのかと問うた、夢に神前に供えられた鹿鳥魚など皆金仏となって雲上へ昇り、諏訪神が現れて、野辺に住む けだもの我に 縁なくば 憂かりし闇に 猶迷はまし とて雲上へ昇る佛達を指さして 業尽有情 雖放不生 故宿人天 同証佛果 と言へり、哀哉、業尽ぬる有情は放つと云へ共助らず、故に且く人天の胎に宿して、終に佛果を証る也、寛提僧正は随喜の涙に声を立、泣々下向された……」(神道集・最終部)

嘉禎三年、長楽寺による殺生御供への異論に対し、翌嘉禎四年に発せられた「諏方上社物忌例」¹⁶にこの勸文の一部を交えつつ神前への供物として相応しい鳥獸と然らざるものとを分けている。僧正の神仏習合的提言は有効であり、結果、諏訪社の供物に変化が生じたことと判断する。

「ゴウジンジョウウ・スイホウフシヨウの勸文に続く「哀哉」は説経語り手本人の主情的コメント、ここは哀れなのですよ哀れと思いなさいとの聴き手への念押し。続く「業尽ぬる」以下は仏語まじりのその和文解釈であり、全体に語り・説経の趣がある。

各地の猟師に伝承された諏訪勸文を福田晃「神道集説話の成立」より次に引く。獲物を解体する際にわたす引導や山の神に感謝を捧

げる唱え言であるが、口頭伝承のため章句が崩れがちである。宮崎県東米良地方の「御須波乃文」では、「うんじんうしよく すいほうだくだに いじんとうじょう ぶつだ界 たじなたすかるといへどもたすからず さらばにんがぶくしてぶつたにかへす。」(336)と、「後狩詞記」(狩之巻・引導)に「……助るといへども助らず人に食してぶつくわに至れ」と唱える。

獵師のほか一般民間への波及として室町時代の御伽草子「諏訪の本地」の終末部に字句がやや変化して「業深有情 雖放生 故宿人中・同証佛果 業の深き有情は、放つといへども生さず。かるが故に身の内に宿して仏果を証せん」と現れる。その校注者、故松本隆信は「……それ故、自分の腹の中に入れて、仏道に縁を結ばせ、悟りを得させるのだ。」^⑮と註す。

かかる肉食思想が海産鮮魚のタンパク質に乏しい山国に発達するのは当然であり、信州ではイナゴ・バッタ・ザザ虫のほか仏教禁忌のイノシシ・カノシシなど四ツ足の肉を食するに至った。一般論として神仏は人の上に位し、人の上に餓鬼畜生の類をおく。ゆえに獣類は人よりも一段と仏に遠く、人に食せられ、人の身体の一部となることによって成仏する、という考え方に立てば獸助けである。諏訪神による偈は肉食の神仏習合の合理化を文言表現する。獸の命を奪ってこれを食う、かかる罪業の合理化が諏訪の思想である。

六 山より海にいたる事情

諏訪思想の海浜方面への伝達事情を考える。福田氏は諏訪社の神人が地方を布教して勸文を山の獵師に伝えたであろうことを前掲書に論ぜられているが、鯨臺の場合、山と海の間には浄土宗の僧侶が介

在し、僧より僧へと宗脈的に伝わって、その結果、碑文に定着したものと論者は考えている。神道・天台はもとより八宗兼学^⑯とも言うべき当時の浄土宗の雑修によって可能となった碑文定着であると判断する。

神道集の作者は「安居院作」と神道集自身の内部に記される。アグイ^⑰は天台宗比叡山の里坊の一にして弁舌巧みに説教する代々の唱導の流れ(澄憲 真弟 聖覚 隆承……)の名称でもある。鎌倉初期、浄土宗法然の門下安居院法印聖覚居住の坊名とも伝え、応仁の乱に焼失後廃絶。その旧跡は京都市上京区前之町にのこる。

神道集の書写・享受者には神官も居るが(「神主禅覚」真福寺本神道集^⑱写)、応仁の乱(1467)を経てなお良順・袋中など法然上人の流れを汲む人々もいた。

旧赤木文庫所蔵の神道集(天理図書館現蔵・巻一欠)は現存九巻にそれぞれ明応三(1494)年・良順書写の署名を有する。良順とは現栃木県益子町の浄土宗(鎮西流の名越ナゴ工派)大沢山円通寺^⑲(開山良栄^⑳)第六世旭蓮社良順のことである。ちなみに蓮社^㉑の称号は浄土宗の法号である。

良順の後、秀吉家康時代の人、弁蓮社袋中上人の手になる『琉球神道記』全五巻の成立および出版がある。

大沢山円通寺にも自筆の切紙函を寄せている袋中(「良定639寂96歳異88」は中国渡航を志して琉球着、折しも秀吉朝鮮の役の後、海彼の人が日本人を警戒して「呂宋南蠻の商船」(袋中上人伝^㉒)に乗ることを得ず、琉球側の慰留もあつて滞留、彼の人が琉球の神道記制作を乞うたという。執筆は帰国後か。

袋中は海彼より九州平戸に帰朝後、久留米の善導寺はじめ西日本をひろく巡歴し(袋中上人伝)、現島根県温泉津方面に赴いて原稿を執筆しはじめ、瀬戸内海を上京中も船中にしてこれを続け、京都大念寺で筆を了えた模様である。

此一冊有草案。自南蛮歸朝平戸。至中国。於石州湯津薬師堂初之。上洛之途中。船中而書之。於山崎大念寺終之。……慶長十二年……
(琉球神道記稿本奥書)

稿本の奥書に慶長十三(1608)年とあるが商品としての出版は、袋中没後、慶安元(1658)年のことである。その出版元は仏教書の出版を得意とする書肆、京都の村上平楽寺であり、その慶安開版、同版ながら二冊本三冊本五冊本があり、売れ行きは好調であったかと思われる。袋中は琉球神道記のほか『神道集略抄』も著した。それらの成立・書誌・校異など委細は神道集活字翻刻本の解題^[13]に譲る。なお慶安版の縮小影印版は宜野座嗣剛訳『全訳琉球神道記』(1987)沖縄学版・東洋図書出版の末尾に附載せられている。

さて琉球神道記巻第五に「諏方明神事」を簡潔に載せ、その末尾に神道集や鯨墓のものと「即」字のみ一字異なる次の偈を載せる。偈に続くアゴン云々は袋中による出典注記と思われる。

業盡有情 雖放不生 故宿人天 即證佛果 阿含經ノ文

この文言が神道集のそれを阿含で訂正した「正しい」文言であるにせよ、鯨墓は草子や琉球系を採用せず神道集系を採ると判断してよいであろう。中世末期より近世初期における浄土宗の僧侶による神道集のかかる受容、阿含云々の出典注記、その学術研究活動は記憶されるべきである。

結びにかえて

鯨墓を建てた浄土宗鎮西派向岸寺は、応永八(1401)年の大般若経に「海雲山西福禪寺」とあり、その昔は禅宗であったが、のち兵庫よ

り下向した西蓮社忠誓英林が浄土宗に改めて海雲山般若院向岸寺として再興(1538)したという(長門市史歴史編 P967)。

向岸寺第五世讃普(1734寂、66歳)による鯨菩提のための観音堂建立が延宝七(1698)年、鯨墓建立が元禄五(1692)年のことであり、讃普二十歳の頃に琉球神道記が出版(1696)された。若い讃普が何処の檀林で学を修め何により勳文を知り得たか未詳であり、ことは向岸寺第三世第四世も念誓松普など後世もまたこれに同じい。

なお鯨墓建立の動機であるが、元禄五年二月三日に近隣地(豊北町島戸浦在)で九州大村領の鯨組漁師六十六人が風波のため水難し葬り供養塔が建立された(豊北町史 P222)。町史 P222 掲載写真に拠れば前者はそのまま現存し、後者誓念寺のものは半壊状態であり、上半「南無阿」部分を折損し「弥陀佛」のみ屹立する。

憶測ながら水難の報は直ちに仙崎方面にも伝わり、二月以降、通浦の有力者早川氏や寺僧協議の上、当地に直接の人的被害なく、その昔の通浦鯨観音堂建立の経緯もあり改めて人間ならぬ鯨の墓建立が発起され、五月十二日の発願に至ったものと論者は思う。

西円寺と厳島、大日比地区の西円寺は讃普の中興開山(1698)であり昭和現在にも向岸寺ご住職綿野得定師の抱えであった。得定師は大岡昇平の『レイテ戦記』に登場し、師の証言を大岡は重視するが平成にご逝去、御子息孝定師もご逝去にて取材の機を失った。而後の小松公映師も得定師ご息女田中(綿野)典子氏のお話によれば「五年くらいで小松師は船橋に戻られた」由である。

鯨墓は当地の有力者早川氏の住宅とともに国指定の文化財であるが西円寺の青バスは県指定の天然記念物である。寺伝による蓮の由来として中国の蓮の種子を円澄が大坂堺の玉蓮寺(玉蓮社)に持ち帰り、これを厳島光明院の僧が護持、さらに西円寺第十世法洲が文政五(1822)年にその種子四粒を得て青海島に播種した(長門市史歴史

編P1042他)という。『敵島図会』^⑭巻二によれば華降山以八寺光明院の開基は袋中の実兄、以八上人であり、母が弁財天に祈って以八が生まれたと伝え、兄弟には後述弁財天の古浄瑠璃もあるという。

敵島の弁天に敵島真言宗大願寺ならぬ浄土宗との関わりは注意されるが金子みすゞの『弁天島』は宮島の敵島神社を仙崎に勧請(分霊)、いま一つ、大日比の弁天島^⑮は、元禄九年がその境目か、往古は西円寺の鎮守であったという。

現島根山口広島県方面の足跡は不明で推測ながら袋中上人の石見三隅での祖跡巡拝と古浄瑠璃『安芸宮島弁財天利生 付タリ以八袋中御伝記』^⑯の存在から光明院訪問はほぼ確実と思われる(寒村仙崎方面は不明)。だが京都知恩院第三十二世雄譽^⑰など有力上人による西日本巡歴は袋中に限らない。修学のため壇林へ上る者、教化のため地方に下向する人、都鄙を往来する旅の『お坊さま』の、徳川鎖国・寺請寺壇以前、神仏習合・室町遊行の名残を残す文化活動の結果、浄土宗鎮西流名越派であろうか、神道集の諏訪思想はさらに深く二重に解釈されて碑面に刻印されるに至ったことと考える次第である。

註

1 寛保二年(1742)長州萩藩作成の深川村の絵図「御国廻御行程記」の当該地名に「フンナカ」とルビされるが「フンチウ」の誤り。

絵図は長門市在住大石正信「正明市十王堂について」に依る。地藏信仰研究・註(13)(大会発表資料)。

2 山口県史料編近世^⑱(2001山口県)に慶安2年の領地関係史料を載せ、「深川より田置迄二里十間……坂一ツ 辻堂坂十二町(P194)と記す。辻堂坂=椎木峠と判断する。

3 高遠信次『詩論金子みすゞ その視点の謎』1999・東京図書出版会刊・星雲社発売

4 今野 勉『金子みすゞ ふたたび』2007・小学館

5 長門市史民俗編・1979・P400

6 長門市史歴史編・1981・近世 交通と運輸の項・P433

7 山口県史料編民俗2・2006・山口県発行・P397~リョウト(漁人)の人生ほか参照、他に方言辞典参照のこと

8 下関市史・年表篇・1978・下関市役所発行・P225

9 神道大系文学編一所収1978 神道大系編纂会(代表松下幸之助)

10 横山重編著『琉球神道記弁蓮社袋中集』1970・角川書店

11 山口県地方史学会秋季大会(1994.11.6於長門市)における史跡巡検

12 福田晃・神道集説話の研究・1984・三弥井書店 P382

13 新潮日本古典集成 御伽草子集 1980・新潮社 P287

14 『敵島図会』巻二(P15)、『光明院の什宝として真言宗弘法大師ゆかりの画像や時宗一遍上人画像その他を載せている。

15 日本古典文学大辞典・1986・岩波書店

16 圭室文雄編『日本名刹大事典』1992・雄山閣出版・P62~63

17 『模範仏教辞典』1932(1973十五版)・大文館書店・P1098

18 註10に収める。P305

19 註10書所収

20 日本名所図会全集・芸州敵島図会・上巻 P147

1928初版・1975復刻版・名著普及会

21 註5書 P661

22 註10書・後記 P590

23 豊北町史(一)・1994 P177

附記 詩の引用は『金子みすゞ全集』(矢崎節夫ほか編 1984 JULIA出版局)掲載本文に依拠し旧漢字を改めた。